The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	呉明益『雨の島ーThe Land of Little Rain』 : 気候変動・障がい者文学と環太平洋的想像力
Author(s)	小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 61-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98086
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

呉明益『雨の島―The Land of Little Rain』

――気候変動・障がい者文学と環太平洋的想像力――

小 杉　世

１．はじめに

台湾の現代作家である呉明益（Wu Ming-Yi）の小説 *The Man with the Compound Eyes*（原題『複眼人』2011 年）については、オーストラリアの中国系アボリジナルの作家アレクシス・ライト（Alexis Wright）の２つの長編小説 *Carpentaria* (2006)、*The Swan Book* (2013) との比較において、論じたことがある。この度、呉明益の短篇小説集『雨の島―The Land of Little Rain』（原題は『苦雨之地』）を翻訳本で手に取り、この短篇集が台北ビエンナーレ 2018（Post-Nature—A Museum as an Ecosystem）において、2018 年 11 月から 2019 年 3 月まで台北市立美術館で展示された作品『苦雨之地』であることに興味を覚えた。日本語版の訳者あとがきによれば、展示会場では、壁に展示された 6 つの博物誌画（うち 5 点は呉自身の作品）の前にベンチが置かれ、展覧会場を訪れる人たちは、短篇を 1 篇ずつ綴じた冊子を手にとり、読むことができる（243）というものであった。アレクシス・ライトの『地平線の叙事詩』（原題 ‘Odyssey of the Horizon’ ）もまた、2017 年開催のヴェネツィア・ビエンナーレのオーストラリア部門の展示作品、ブリズベン生まれのアボリジナルのアーティスト Tracey Moffatt の *My Horizon* に対するリスポンスとして創作された短篇である[1]点で、この 2 人の作家の創作活動にはどこか呼応するものがある。

日本語訳に付された呉明益の「後記」によれば、『雨の島』はアメリカのネイチャー・ライティング作家、メアリー・オースティンの *The Land of Little Rain* (1903) から取ったタイトルであり、翻訳本にも原書にも、副題としてこの英語タイトルがついている。原題の「苦雨」は雨が少ないせいでも、また多すぎるせいでもあるという(236)。アレクシス・ライトの近未来ディストピア小説 *The Swan Book* は、気候変動の影響でスワンが地上に残されたわずかな水を求めて難民となる未来を描いたが、『雨の島』では、人間も雑草や作物、人間以外の種の生物も生きづらい未来世界を描いている。『雨の島』の 1 頁の短いプロローグでは、次に続く短篇「闇夜、暗い大地と黒い山」の主人公とも少し重なるイメージの「作家」が登場し、

[1] 小杉世「アレクシス・ライト『地平線の叙事詩』――先住民文学と難民文学をつなぐ水平（地平）線」『Cultural Formation Studies V――言語文化共同研究プロジェクト 2022』大阪大学大学院人文学研究科、2023 年、pp. 46-52。

「雨の多い島にはもう雨が降らず、畑も死にかけている」(5) と語る。プロローグに端的に表れているように、この短篇集には、草、鳥、魚、ミミズ、ヒトの間の区分がない。「顔見知り」のタカサゴモズにご馳走するバッタもいないと嘆く語り手は、「自分の作物を抜いてしまうと、心臓が飛び出しそうになる。ああ、自分で育てたものを殺してしまったなんて」(5、下線引用者) と述べるように、根の絡んだ雑草と間違えて作物を引っこ抜き、枯らしてしまうのを、育てた子供を不注意で殺してしまうのと同様に感じている。

原題の『苦雨之地』は、また「黒い雨」「苦い雨」＝放射性降下物を含んだ雨も連想させる。*The Man with the Compound Eyes*（『複眼人』）は、閃光の後に押し寄せるゴミの渦の津波（島民は隕石の落下だと思う）に呑まれて瞬時に消滅する太平洋の小さな島の描写が太平洋核実験を想起させ、台湾の南部に核廃棄物を運搬する道路が建設されるという描写から台湾の南東にある蘭嶼島の核廃棄物施設のことが婉曲的にほのめかされる。一方、『複眼人』と同じく近未来を舞台にした『雨の島』の「とこしえに受胎する女性」には『複眼人』の登場人物が再び登場し、タオ人の母をもつ青年の視点から、蘭嶼島の核廃棄物処理場とタオ人の詩人で活動家のシャマラン・ラポガンなども関わった住民運動のことが言及され、政府が核廃棄物を島外に移動するという約束を実現しないまま数十年も経って、青年は二度と故郷に帰ることのない「ツバメ」となったこと(196)が語られる。互いに絡み合う６つの短篇からなる『雨の島』には、泥土からメダカを目覚めさせる水、ミミズ（雨虫＝Regenwurm）、「クラウド（雲）の裂け目」とよばれるコンピュータウイルスなど、様々な雨のイメージと結びつく言葉に満ちている。

本稿では、『雨の島』の２つの短篇「闇夜、暗い大地と黒い山」（原題：「黑夜、黑土興黑色的山 Black Night, Black Earth, Black Range）」）と「人はいかにして言語を学ぶか」（原題：「人如何學會語言 How the Brain Got Language?」をとりあげ、スコットランド系ニュージーランド人作家ジャネット・フレイム（Janet Frame）の短篇「ハリエニシダは人じゃない」や、聴覚障がい者の視点から原爆投下時の広島を描いたロンドン在住日系人アーティスト Chisato Minamimura（南村千里）のイギリス手話による一人芝居 *Scored in Silence*[2]とも比較しながら、障がい者文学として読む。

２．「闇夜、暗い大地と黒い山」とフレイムの「ハリエニシダは人じゃない」

スコットランド系ニュージーランド人の作家ジャネット・フレイムの小説は、統合失調症、失語症、発達障がい、癲癇患者など、障がいをもつ登場人物たちが、健常者の言語空間の外、すなわち、「アルファベットの外縁」に生存するさまを描いている（小杉 2017）。フレイムの短篇小説「ハリエニシダは人じゃない（‘Gorse is Not People’）」の主人公の少女ナイーダは、その一人である。幼い頃から精神病院で育ち外の世界を知らないナイーダは、知的障害

[2] Auckland Arts Festival において、2023 年 3 月 12～26 日、英語字幕付のオンライン上演（舞台を録画した映像をストリーム配信）が行われた。3 月 11 日には Aotea Square での上映と post-show talk もオンサイトで行われている。

をもつだけでなく「小人」であり、日常生活の行動にも困難を伴う（小杉 2017:155）。そのナイーダは護送の車の窓から野原一面に甘い香りを漂わせて咲く黄色いハリエニシダ（繁殖力の強い外来種で「農夫の疫病神 (farmer's curse)」（Frame105）と呼ばれる）を見て、自分と同じく「誕生日のない」(Frame 105) この嫌われものの雑草とともにいたいと願う（小杉 2017:156）。フレイムの短篇のナイーダは結局一生、精神病院から出られないであろうことが読者に示唆されるが、呉明益の短篇の主人公ソフィーは、やがてミミズ（雨虫）学者になる。呉明益はこの短篇に自ら描いた「台湾固有のフクロフトミミズ」の手描きスケッチを挿絵としてつけている。

呉明益の短篇「闇夜、暗い大地と黒い山」の主人公ソフィーは、捨て子で、軟骨無形成症 (236) を患い、彼女の身体は成長せず「おちびさん」と呼ばれる。台湾で地元の人が「黒い山脈」（30）と呼ぶ地帯で遭難しかけたドイツ人の神話学の教授で福音教会の使徒であるマイヤー氏は、ブヌン人のダフ（『複眼人』に登場する人物）に救助され、黒い山脈の台湾原住民の村落の教会に近い乾いた水路に捨てられていた赤ん坊のソフィーと、英国に養子縁組されたが養父の「不適切な扱い」（32）を受けて再び養子に出されたコンゴの背丈の大きな男子の二人をマイヤー夫妻の子供として育てる。ソフィーは自分の体の大きさが周囲の子供たちと差が開き、彼女の体は元のままで、「どんどん奇妙なバランス」（36）になっていくのに悩み、小さすぎて「見えない」とほかの子供たちからいじめられ、虫のように踏みつけらえるのをいつも怖れている。

ソフィーが泥土に関心を持つようになったきっかけは、5 歳のときマイヤー父さんからもらったプレゼントの「愛の土」（メダカの卵が保存された土）に泉の水を注ぎ、魚の稚魚を孵化させたときからだった。しかし、孵化した稚魚は 3 日後にすべて死んでしまい、「泥のなかにずっと眠らせておくほうがよかったのか、それとも起こしたほうがよかったのか」（15）と、目覚めさせた生命を奪うことになったことに深く思い悩む。この短篇のソフィーは、フレイムのディストピア小説 *Intensive Care* (1970) の精神病患者が一層処分される悪夢（小杉 2017: 149）と同様に、「絶滅」の危惧を常にいだいている（Chang 245）。あるとき、雑誌でドードー鳥の絶滅について知り、ドードー鳥は「絶滅した」のか「絶滅させられた」（18）のかと考え込む。

子供のころから、空を見上げるのを嫌い、いつもうつむいて地面ばかり見ていたソフィーは、やがて、黒い大地の下に関心を寄せ、彼女自身ミミズ（雨虫）になって土に潜り込み、昆虫の幼虫や植物の種に出会うことを想像する（17）。長年、睡眠時無呼吸症候群を患っていた義父のマイヤー氏は、ソフィーが高校 3 年生のとき、「過去の症状が練習だったかのように」「闇夜のうちに呼吸を忘れて」（20）亡くなり、牛 1 頭を体の後ろに隠せるほど脂肪を蓄えていた義母も「免疫システム」の不全で、3 分の 1 の体重になり、亡骸は「担架よりわずかに高いだけ」（23）になる。土を掘ることに専念し、ときに泥を口にいれさえするソフィーは、「暗闇の世界に適応」したミミズ（雨虫）の生態にとりつかれ、「雨虫娘」と呼ばれたが、やがて大学に進学し、「小さな科学者」となる。人間の出したあらゆるゴミを土と一

緒に体内にとりこみ、「土を呑み込んで目に見えない栄養を体に蓄える」(18) ミミズは、「暗闇の世界」のゴミ清掃人で、ゴミを栄養分に変えるその営みは、闇の世界の体験を糧にして、他の生命体にまた自らに栄養分をもたらす作家の営みとも通じる。

ソフィーはこの後、次の短篇「人はいかにして言語を学ぶか」に登場する。聴覚を失った主人公の青年が暗いトンネルを 1 時間あまり手探りで歩き続けてやっとトンネルの出口に小さな銅貨ほどの光が見えた瞬間、「人間は音が聞こえなくとも生きてゆけるし、目が見えなくとも生きてゆける」(57) と感じるが、その光の出口からこちらに向かって歩いてくる人影に気づく。その「小さな」女の子 (58) がこのソフィーであり、この出会いが、後まで忘れえない印象を青年に与え、ポジティブな触媒となる登場人物でもある。

３．「人はいかにして言語を学ぶか」—新しい言語の模索、手話言語と手話演劇

『雨の島』の 2 番目のこの短篇には、やはり呉明益が描いた色鮮やかな黄色の「コウライウグイス」のつがいの手描きスケッチが挿絵としてつけられている。この挿絵は、聴覚を失った主人公の青年「深い目」(手話者のニックネーム) が、短篇の最後で恋心を抱く小翠(シアオツイ)との間に奇跡的に姿を現し、二人のコミュニケーションを成り立たせる、物語のなかで希望の象徴ともなっている稀有な鳥である。

主人公の青年、狄子(ディーズ)は鳥類画家の母親のもとに生まれ、『複眼人』の少年のように、小さいころから言葉をあまり話さず、自閉スペクトラム症 (236) だが、「音に対しては非凡な記憶力」(43) を持ち、鳥の声を正確に五線紙に書きとめることができる。母親は息子は「病気なんかじゃなくて、ただ自分だけの星に暮らしている」(45) のだと思う。やがて、大学に進学し、「鳥の声の研究者」(236) になるが、母親の死をきっかけに、突然、聴力を失い、「ウイルスによる神経性聴力損失」(54) と診断される。

狄子はトンネルの出口近くで、前章の短篇の主人公ソフィーに出会い、細長いガラス管に入ったミミズをもらう。ミミズの入ったガラス管を手に、暗くて長いトンネルを出たとき、狄子は「様々な鳥の声に抱かれ」、彼の「記録し、記憶した声は去ってなどいない」(59)と気づく。長いトンネルを抜けて再び光のなかで得た視覚が彼の音の記憶を呼び覚ましたのだ。

狄子は手話を習おうと決意し、そのクラスで「そばかす」というサインネームの少年に出会い、「そばかす」は狄子に「深い目」という新しいサインネームを与える。この名前の変化は、主人公が別の世界でのアイデンティティを得たことを示唆している。狄子は新しい言語を獲得し、これまで「言葉が出ない」ことに悩んでいたが、今はこんなにたくさんの「言葉」が自分の体に潜んでいたこと、情緒や感情を伝えることもできることに気づく。先天的な聴覚障がい者に近い「そばかす」に、狄子は「聴覚障がい者のバードウォッチング」を提案し、鳥の声を聴いたことのない人たちに、鳥の声を表現する新たな「言語」を考案しようとする。その過程で主人公は、いかに手話で表せないことが多くあるか、また、いかなる言語でも表せないものがあることを確認する。この新しい言語の模索は、フレイムなどの小説の言語の模索とも無関係ではない。

短篇の最後では、「深い目」はチームの「長い睫毛」（小翠（シアオツイ））にひそかに想いをよせ、人が見ていないときに、そっと彼女の方向に向けて、コウライウグイスに与えた名前「水草／揺れる／渓流で／ゆるやか」のサインを送る。最後の場面は、深い目のサインに気づいた長い睫毛が、彼がコウライウグイスを見つけたと思い込んだその瞬間、「太陽のように黄色く輝く全身の羽毛」(72)を身にまとった幻のコウライウグイスが奇跡的に二人の間に現れ、二人をつなぐかのように、深い目のいる場所をちらと見ると、また小翠（シアオツイ）のほうをちらと見る。「鳥は幾度か尾羽を揺らし、くちばしを開き力をこめてはっきりと鳴いた。その声は石にも聞こえただろう。それから取りは羽を広げて空中に幾筋からの波を描き、午後の森のなかに姿を消した」(73 下線引用者)。小翠の「微笑み」はトンネルでミミズをくれたソフィーの「微笑み」を思わせたと深い目が語るのは、自分の信念や生命への愛情を疑わないソフィーの表情が、ソフィーのグロテスクな外観にも関わらず、希望の光を与えてくれるものであることを示唆している。

2023 年 3 月にオークランド芸術祭で、コロナ禍収束後の新しい観劇の形として、２つの舞台芸術の催し物がオンライン（ストリーミング）上演で開催された。そのひとつが、ロンドンに活動の拠点を置いている日系人アーティスト Chisato Minamimura（南村千里）の手話と身体表現、デジタル映像、アニメーションによる一人芝居 *Scored in Silence* であった。自ら聴覚障がいをもつ Minamimura はデジタル映像技術をうまく活用して、せりふのない手話と英語字幕による上映を行っていた。聴覚障がい者が原爆投下時の広島を音のない世界でどのようにとらえるか、ヒロシマの物語を国外の舞台で一般の観衆を対象にわかりやすく伝えるという教育的な意義と、そして、現代の社会において、聴覚障がい者が感じる不便や遭遇する社会的困難についても伝える舞台であった。日本でも北九州未来創造芸術祭で上演されたが、その日本語タイトルが『沈黙の記譜』であるのは、上で論じた呉明益の短篇の主人公、狄子の鳥の声の記譜のイメージと重なり、興味深い。障がい者と健常者が共同制作をしているダンスグループ Candoco Dance Company で活動をしてきた[3] Minamimura の本作品はデジタル演劇・ダンスの新しい可能性を模索している。

４．おわりに

アレクシス・ライトが 2023 年 4 月に出版した新作の長編小説 *Praiseworthy* は Miles Franklin Literary Award 2024 ほか、３つの賞を受賞した。「地球温暖化と地球規模のウイルス感染によってもたらされる惑星的な大災害」(‘planetary catastrophes of global warming or global viruses’ 3) （小杉 2023: 51）の近未来を描く 700 頁を超えるこの長編小説も含め、今後、オーストラリア、ニュージーランド、および太平洋島嶼部のアートと文学における様々な種の生命の共生のテーマについて考究していきたい。

[3] 北九州未来創造芸術祭（ https://www.city.kitakyushu.lg.jp/page/art-sdgs/artist/chisato-minamimura/)

※本稿は基盤研究(C)「人新世の共生をめぐる文学―太平洋島嶼部の先住民・移民文化とグローバリゼーション」（代表者：小杉世、課題番号 22K00427）および、基盤研究(B)「トランス／ナショナルな視座からの核・原爆の〈表現〉の研究」（代表者：松永京子、課題番号 24K00057）の助成を受けている。

引用文献

Chang, Yi-Jen. Articulating Ecological Ethics and Politics of Life in Ming-Yi Wu's *The Land of Little Rain.* in Ananta Kumar Giri & Su-Chen Wu, editors., *Cross-Currents of Social Theorizing of Contemporary Taiwan: Self, Culture and Society*. Palgrave Macmillan, 2022, p. 241-273.

Frame, Janet. *Gorse is Not People: New and Uncollected Stories*. Penguin Books, 2012.

----. *Intensive Care*. 1970. George Braziller, 1994.

Kosugi, Sei. 'Trans-Pacific Imagination in the Anthropocene: The Work of Wu Ming-Yi and Alexis Wright', *The Southern Hemisphere Review*（『南半球評論』）vol. 34, March 2019, pp. 12-31.

Wright, Alexis. *Carpentaria*. Giramondo Publishing, 2006.

----. 'Odyssey of the Horizon.' In Tracey Moffatt, *My Horizon.* Edited by Natalie King. Thames & Hudson, 2017, pp. 114-21.［アレクシス・ライト『地平線の叙事詩』有満保江訳、現代企画室、2023 年.］

----. *Praiseworthy*. Giramondo Publishing, 2023.

----. *The Swan Book*. Giramondo Publishing, 2013.

Wu, Ming-Yi, *The Man with the Compound Eyes*. Translated by Darryl Sterk, Vintage Books, 2014.［呉明益『複眼人』夏日出版、2011 年］

小杉世「ジャネット・フレイム――アルファベットの外縁から見た世界」『オーストラリア・ニュージーランド文学論集』彩流社、2017 年、pp.135-179.

呉明益『雨の島―The Land of Little Rain』及川茜訳、河出書房新社、2021 年.［呉明益『苦雨之地』新經典圖文傳播、2019 年.］